様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２５２４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３２９３

研究課題名（和文）多民族国家におけるナショナリティとエスニシティの構築―マレーシアのインド系移民

研究課題名（英文）Consuruction of Nationality and Ethnicity in Multi-ethnic State: Indian Diaspora in Malaysia

研究代表者
古賀　万由里（KOGA, MAYURI）

開智国際大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：２０７８２３４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：多民族国家のマレーシアにおいて、インド系移民のエスニシティの在り方を、ヒンドゥー寺院とタミル語小学校、NGOの活動、エスニック・コミュニティから、分析した。エステートに建てられたヒンドゥー寺院は、1970年代以降から開発のために移転または破壊されてきた。タミル語小学校も同様に、閉鎖または移転させられた。2000年以降はその傾向が顕著となり、ヒンドゥー教徒のNGOが集まり抗議活動を行った。マレーシア社会で他民族と共生するためは、言語、宗教、出身地を超えて、Malaysian Indian として自らの文化や権利を守り、他民族と文化を共有することが必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
マレーシアでは1969年の民族対立以降、政府は民族問題を煽る報道を禁じ、「ワン・マレーシア」スローガンを打ち出し、多民族の融和をアピールしてきた。だが少数派のインド系や中国系は、マレー系中心社会で差別感や疎外感を感じ不満を抱いている。マジョリティであるマレー系住民の研究が多い中で、マイノリティのインド系コミュニティ側からの視点でエスニック問題を分析し、イスラーム社会の中でヒンドゥー教徒がいかにして伝統文化を保持し継承しているのかを明らかにした。またマイノリティの権利かまたマジョリティの権利かという公正性の問題点を提示し、自民族間の融合や他民族との文化の共有といった多民族共生の可能性を示唆した。

研究成果の概要（英文）：The study on Hindu temples, Tamil Schools, and Indian advocacy NGOs in Malaysia revealed the following matters. Some temples in the estates were demolished and relocated by developers. This caused the ethnic sense among Hindu communities and caused rival feelings between Muslim Malay and Hindu Indian. Some Tamil School were also demolished and relocated. It is not easy to protect and transmit Hindu culture. Indian activists and NGOs are working to protecting temples and schools to preserve Hindu culture. Malaysia Indian are divided into subgroup according to religion, language, and native place. They have identity as Malaysian Indian as well as particular ethnicity. They have rival feeling each other. To live with other ethnic group in Malaysia, they should unite and protect their culture and keep their ethnic identity as Malaysian Indian.

研究分野：文化人類学

キーワード：マレーシア　インド系移民　ヒンドゥー寺院　タミル語学校　NGO

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2016 年にマレーシアにおけるインド舞踊の展開を調査中、出会うインド系住民が、大きな不満を抱いているのに気が付いた。それは、１）英領時代につくられたヒンドゥー寺院が開発のために破壊されていることと、２）国民型タミル語小学校が廃校になっていることである。ヒンドゥー教徒にとって聖なる建物である寺院が壊されているのはどういうことなのか、、寺院関係者や信者、宗教・政治活動家らに話を聞くと、英領時代にエステート（農園とその他の施設）に建てられた寺院が、開発のためエステートが取り壊される際に、移転または破壊されることが、2000 年代に顕著になっているということだ。移転先は、下水処理場の近くや排水溝の近くであり、聖地にふさわしくない場所で、本国のインドではありえない話であった。また、タミル語小学校は、農園で働く人の子供たちが通えるようにエステート内に作られたものだが、学校も開発に伴い、移転や廃校を余儀なくされている。多民族の融合を謳うマレーシアで度々不協和音を聞いた。インド系移民にエスニック・アイデンティティを尋ねると、みなマレーシア人であると答えるため、マレーシアの一員としてのイスラーム国家で暮らすマイノリティ、ヒンドゥー教徒がいかに自文化を保持し、エスニック・アイデンティティを維持しているのを明らかにすることが課題となった。

２．研究の目的

国際移民の中でもインド系移民は現在最も多いが、インド系移民研究は華人研究に比べ少なく、国との関係が希薄である。マレーシアには英領時代からインド系移民が数多く住んでおり、多民族国家の重要な一員となっているが、イスラーム化とマレー人優遇政策が進むマレーシアにおいて、教育、就職、土地所有などで不平等な立場にある。特に近年では、ヒンドゥー寺院の破壊やタミル語小学校の閉鎖が彼らに大きな衝撃を与えている。一方でマレーシアは「一つのマレーシア」として融和を強調し、ナショナリティを構築しようとしている。宗教施設、言語教育といったエスニシティが表出する問題に焦点を当てることで、多民族国家におけるナショナリティとエスニシティの構築を明らかにし、グローバル社会でマイノリティが共生する方法を探る。

マレーシアには、先住民族とマレー人の他に、15 世紀からインド系商人とさまざまなサービス業に携わる人たちが移住してきた。19 世紀になると、インドからは農園労働者として、中国からは錫鉱山労働者として、人が移住するようになり、1963 年にイギリスから独立した際は、マレー人をマジョリティとし、中国系住民、インド系住民がそれに続く、多民族国家であった。インドは特に南インドのタミル地方から移住する人が多かったため、タミル語とタミル文化がマレーシアには根付いた。

1969 年にマレー系住民と華人との間で衝突が生じて以降、民族問題を荒立てないよう、政府は国民をコントロールしている。また、マレー人の所得の低さを是正するために、ブミプトラ政策といって、マレー人を含むブミプトラを優遇する政策を始めた。さらに、1970 年代、世界のイスラーム化の流れの中で、マレーシアでもイスラーム色が色濃く映し出されるようになり、非イスラームに対する風当たりが強くなった。政治問題として捉えられがちであった多文化主義やエスニック問題を、マイノリティの草の根的運動からその実践を分析することで、政策と格闘するマイノリティの戦略と心情といったミクロな領域でエスニシック問題をとらえる。また、中国系住民は、非マレーとして同様の待遇を政府から受けており、インド系住民と立場的に類似している。宗教文化においても霊媒信仰など共通点がみられるため、中国系住民との関係から、民族共生の可能性を考える。

第一に、ヒンドゥー寺院の運営状況と存続の有無を調べ、また英領時代にエステート（農園）に建設されたヒンドゥー寺院が、現在どのような状況にあるのか、スランゴール州のエステートを調査し、存続の有無や運営状態、地域住民や国との関係を明らかにする。

第二に、マレーシアには国民型小学校（マレー語が媒体語）、中国語小学校、タミル語小学校があるが、それぞれの施設や教育について比較をする。また、なぜタミル語小学校が移転や廃校の対象となっているのかを明らかにする。

第三に、学校のシラバスに含まれないヒンドゥー教教育がそのようになされているのか、学校、宗教団体、NGO 関係者らに聞き取り調査を行い、明らかにする。

第四に、インド系移民がかかえる、学校のドロップアウトやギャング化、無国籍、貧困など負のサイクルを断ち切るべく活動を展開している NGO に着目し、社会的弱者となっているインド系住民の地位の向上の可能性を考える。

第五に、マレーシアのインド系移民の代表的祭りであるタイプーサムを、クアラルンプールとペナンで参与観察し、寺院や巡礼者、政府関係者らにインタビューを行い、寺院と州政府の関係や、中国系住民の巡礼への参与と、中国信仰とヒンドゥー教のシンクレティズムの状況などを明らかにする。

第六に、様々なカースト集団や、コミュニティの協会や寺院の活動から、インド系移民内部にみられるエスニック・アイデンティティについて明らかにする。

３．研究の方法

調査は 2017 年 7 月 29 日から 8 月 6 日、2018 年 1 月 28 日から 2 月 7 日、8 月 5 日から 8 月 15 日、2019 年 2 月 20 日から 3 月 3 日、8 月 2 日から 8 月 16 日、2020 年 2 月 5 日から 3 月 17 日にかけて行われた。調査対象は、スランゴール州、クアラルンプール、クアラ・スランゴール州、ペナン州、ペラク州にあるヒンドゥー寺院と、スランゴール州の政府系タミル語小学校、および宗教団体、NGO である。

研究分析の対象となるのは、主にフィールド調査により得られたインフォーマントからの情報や語り、意見である。インフォーマントを探すにあたっては、インド系住民の寺院や宗教文化について詳しい、マレーシアの大学研究者やオーストラリアの研究者、また現地で知り合った人のつてをたどった。インフォーマントから新たなインフォ―マントを紹介されることにより、さらに調査対象者が広がっていった。政府関係者との会合や学校訪問には、所属大学からのレターを事前に送り、アポイントメントをとってから訪問した。さらにインド系の国会議員、教育省副大臣、市議会議員、NGO メンバー、活動家、土地財政協同組合社長、大学研究者らに、インド系住民と関係の深い三大施設である、寺院、タミル学校、NGO の現状と展望、および政府の出している Malaysian Indian Blueprint の計画性と実行性についてインタビューを行った。

第一のヒンドゥー寺院調査にあたっては、まずエステートにかつて存在し、現在係争中の寺院を探し、司祭や寺院委員会のメンバー、宗教活動家、政府のインド系およびマイノリティの問題を管轄する人、NGO アクティビストらから、寺院の歴史や政府、開発業者との争いの経緯、現在の寺院の状況、政策などについて話を聞いた。次に、寺院の土地所有権をもち、英領期から存在し続けている寺院を訪問し、寺院の歴史や現在の運営などについて調査を行った。

第二のタミル語小学校調査に関しては、スランゴール州で、移転を迫られているタミル語小学校と、従来の場所に存続する政府系タミル語小学校の関係者から聞き取り調査を行った。また、国民型小中学校や中国語小学校も訪問し、宗教教育や道徳教育に関して話を聞き、タミル語小学校比較した。

第三に、ヒンドゥー教の文化や慣習などの教育実践に関して、スランゴール州にあるシルディサイババ協会や ISCKON（クリシュナ意識協会）などの宗教団体や、Hindu Dharma Maamandram や Malaysia Hindu Sangam などの各種活動に参加するとともに、関係者らに、イスラームの国でいかにヒンドゥー教の普及活動を行っているのかを尋ねた。

第四の、ドロップアウトしたり、無国籍のため貧困層となったインド系住民の支援については、インド系移民の支援を行ったりしている Dhrra Malaysia や MySkills Foundation を訪問し、また政治家や政治活動家らから、貧困の原因や貧困からの脱却方法について聞いた。

第五の、ヒンドゥー儀礼の実践調査では、タイプーサム祭の巡礼に、クアラルンプール（2018 年 1 月）とペナンの 2 カ所（2019 年 2 月）で参加した。巡礼過程にみられる、主要寺院での儀礼を観察するとともに、巡礼者らにインタビューを行った。また、ペナンの主要寺院は、州政府が管理しているため、宗教資産管理委員会の関係者らに、ペナンでのヒンドゥー寺院の移転問題などの対処の仕方について聞いた。その他、ヒンドゥー寺院での火渡り儀礼や女神寺院の祭礼に参加し、儀礼や憑依の仕方を観察した。

第六の多様なエスニシティに関しては、カーストの伝統的職能者（洗濯屋、床屋、金細工師、占星術師）に彼らの移住の歴史や仕事内容、カスタマーについて話を聞いた。また、スリランカ・タミル、チェッティヤール、テルグといった、出身地やカースト、言語によって異なるコミュニティの団体や寺院を訪れ、関係者らから、コミュニティの文化維持活動についてインタビューを行った。

４．研究成果

インド系移民のヒンドゥー教徒は、マレーシアという国家がイスラーム教徒の国であるため、宗教マイノリティであり、さらに彼らの中でも、出身地やカースト、言語が分かれるため、インド系移民とひとくくりにできず、多様なエスニック・アイデンティが、インド系住民の立場を複雑化させているといえる。中でも、寺院と学校は民族文化が表出する場であり、これらの破壊および移転は、インド系住民にとってセンシティブな問題であった。それゆえに、人々の感情や思惑が入交り、人によって語り口が異なる、それぞれのストーリーがあることがわかった。様々な事例から、上記の目的に対応した形でまとめると、以下のようになる。

第一の、ヒンドゥー寺院の実態調査から、寺院は次の３つのタイプに分けられることが分かった。（１）インド系移民が土地を買収し建立したコミュニティの寺院、（２）英領期にエステート内に建立された寺院、（３）移転させられ、行政指導の下に統合、または集合された寺院。

１のコミュニティ寺院は、19－20 世紀の英領期に商人や農園管理者としてマレーシアに来たインド系移民によって建てられたもので、土地は寺院が所有している。スリランカ・タミルやチェッティヤールやピッライなど、安定したコミュニティで、各コミュニティの意識が高い。

２の寺院は、土地所有権を保有しておらず、開発に伴い撤去または移転されていること、寺院の多くは正式に登録されていないこと、国有地や私有地に不法に建てられている場合もあるということがわかった。またスランゴール州に現存するヒンドゥー寺院を対象にした聞き取り調査により、破壊と移転を免れたケースの特徴として以下の点が明らかになった。①市議会議員や

人権NGO、活動家や弁護士の働きかけがあった、②寺院側と信者たちが移転・破壊に強く反対した、③開発途中に事故があり、それが神の祟りであるということで開発計画が変わった（中国系開発業者の場合）。

３のタイプは、政府が政府の土地の一角を、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教などイスラーム教以外の宗教コミュニティに売り、そこに多様な宗教施設が集まったテンプル・コンプレックス（ペナン）である。他にも、ヒンドゥー寺院だけのコンプレックスがクアラルンプールに存在する。

これらの成果については、「宗教と社会」学会、Malaysian Studies Conference、 文化人類学会において発表し、論文「開発に抗する宗教―マレーシアのヒンドゥー教をめぐる事例から」（『宗教と社会』）としてまとめた。

第二に、タミル語小学校は寺院と同様、エステートに作られたが、開発が進むと廃校または移転となる学校が相次いだ。エステートにインド系住民がいなければ、小学校も必要ないからである。政府の土地にない学校は、国の支援が十分に受けられないため、国民型小中学校や、華人ビジネスマンの支援を受けている中国語小学校に比べ施設が不十分であり、教員の質が保てない。国民小中学校ではイスラーム教を勉強したり祈りの時間があるが、ヒンドゥー教徒がヒンドゥー教の勉強をしたり祈ったりする時間はない。イスラーム教の授業の間は、道徳の授業を受けている。そのため、寺院や宗教ボランティア、宗教団体が学校に、不正規に来てヒンドゥー教を子供たちに教えている。　エステートにあるタミル語の小学校は、国民型小学校や中国語小学校に比べ質が低いと言われているが、スランゴール州のエステートにあるタミル語小学校では、 PTAやNGOの協力を得て、貧しい家庭の子供に本の贈呈や学校への送迎を無料で行うことにより、生徒やその家庭に満足度の高い教育とサービスを可能にしていることが校長へのインタビューにより分かった。

第三に、マレーシアには他のヒンドゥー教移民がいる国と同様、ISCKON やサイババ、ブラフマクマーリーといった新宗教団体が多く存在している。彼らは貧しい人々に無料の食事を提供するとともに、現代の宗教的指導者が解釈したヒンドゥーの教えを人々に伝え、タミル語小学校でもヒンドゥー教育に努めている。新宗教団体は、本国インドのように自然とヒンドゥー教の教えを身につけるのが難しいインド系移民が、ヒンドゥー教を学ぶ場を提供している。

第四に、学校をドロップアウトして軽犯罪に手を染めるケースがインド系住民にみられる。これは、エステートに住んでいたために十分な教育が受けられず、都市へ出てきても安定した職に就けないのと、タミル語小学校出身者は中学でマレー語が媒体語の国民型学校に入るため、授業についていけない場合が多い。すると、学校をやめることになる。こうした人々を、NGOでは無料で職業学校の宿舎に泊め、技術を身につけさせ、社会に送り出している。こうした活動を支援してくれるサポーターを探すのが容易ではないが、経営者自らが他の職業で稼いだお金をつぎ込んで、インド系移民の子供たちを援助している。インド人コミュニティをサポートするアドボカシー型NGOが、貧困層にとって重要な役割を果たしていることがわかった。

第五に、マレーシアのヒンドゥー教徒にとって大祭は、ムルガン神を祀るタイプーサムである。顔や体に針を刺す自傷行為は、多くの観光客を呼び寄せている。中でも、クアラルンプール近くにあるバトゥケーブのムルガン寺院は、国内外から観光客が訪れる観光名所でもある。前政権も寺院を支援するなど、政治にも利用されており、莫大なお金の管理が問題となった。ペナンのタイプーサムも盛大で、地元のインド系住民の他に、中国系住民の参加者が多く見られるのが特徴である。ペナンは中国系住民の割合が多く、ヒンドゥー神へ供物を捧げることにより幸運が訪れるという信仰が根付いている。また、マーリアンマン女神を観音と同一視するなど、ヒンドゥー教と中国信仰のシンクレティズムがみられる。中国系開発業者がマレー系開発業者に比べ寛容なのは、こうした信仰の類似性によるものだと考えられる。また、ペナンの寺院は州政府が管理しているため、伝統的管理者との対立も見られた。その他、火渡りや憑依を伴う儀礼の数々は、インドでのタミル人の信仰形態が、マレーシアのタミル人にも伝播、感染していることを示している。

第三と第五に関しては、論文「慣習から宗教へ―マレーシアにおけるヒンドゥーイズムの実践と変容」『響きあうフィールド，躍動する世界』に成果を発表した。

第六に、マレーシアにはインドから商人や農園労働者の他、様々なカースト・コミュニティの人々が移住した。裕福な商人の移住に伴い、床屋や洗濯屋など、様々な職人が移住した。インドの風習に習い、マレーシアでも決まった職人にインド人商人は仕事を依頼していた。
また、農園労働者の多くはタミル人（タミル語を母国語とする）であったが、農園管理者としてテルグ人（テルグ語を母国語とする人）、マラヤーリ（マラヤーラム語を母国語とする人）など、複数の言語コミュニティも存在した。また、ヒンドゥー教徒だけでなく、ムスリムは商人として、北部のシーク教徒は警備員として、さらにスリランカに住むタミル人も農園管理者として移住した。言語、宗教、カースト、出身地により分かれて、それぞれの協会や寺院を所有しており、婚姻関係も原則、同コミュニティ内で結ばれている。よって、インド系住民は「マレーシア人」というナショナリティはもっているものの、各々が「インド系」の他に独自のエスニック・アイデンティティをもっている。特に、インド系の中でもマイノリティの言語団体は、タミル文化に同化されずに自文化を保持しようとしている。スリランカ・タミルやチェッティヤール、インド・ムスリムも他のコミュニティに対して閉鎖的である。このように異なるコミュニティ同士の対立意識が根強い。この多様性が、インド系住民全体の団結を弱めていることは否めない。

マレーシアのインド系住民に焦点を当てた研究はまだ少なく、日本では近年、やられていない分野である。マレーシア研究の中では、マイノリティの視点から見た多民族国家の問題点とそれに対する取り組みを分析し、マレーシア社会を多角的にとらえることに貢献した。。移民研究においては、移民はエスニック集団やマイノリティとして位置づけられるが、マレーシアの場合、インド系移民は細部に分かれており、「タミル人」に対しては「テルグ人」というエスニシティが、「マレー人」に対しては「インド人」というように、エスニック・バウンダリーが変わっていくことを提示した。また、アファーマティブアクションは、社会的弱者であるマイノリティが保護されるのが通常であるが、マレーシアではマジョリティのマレー人が優遇されており、マイノリティ＝弱者とは必ずしも言えない状況である。このことが、マイノリティの不満を煽り、様々な分野でインド系移民が被差別意識をもつ要因となっている。宗教研究においては、インド系住民のヒンドゥー教と、中国人住民の道教・仏教が融合されているシンクレティズムの現象を見出した。インドには華人が少ないが、他国ではこれほどの習合は見られない。歴史的、文化的な風土と政治との関係を調べることが、今後の課題である。

イスラーム教が国教であるマレーシアにおいて、宗教・民族マイノリティであるインド系移民には、国の対応に不満を抱いている人が多くみられる。しかし、他のインド系移民のいる地域と比べると、母国語（タミル語）の存続率や伝統風習の保持率は明らかに高い。その理由としては、政府系のタミル語小学校が英領時代につくられ、それが今も場所を変えながらも存続していることと、タミル語メディア（衛生テレビ放送、ラジオ放送、新聞、雑誌）の普及による。1957 年には総人口の 11.26%であったが、現在は 7%を切っている。マレー人の出生率の高さと、マレーシアに在住する外国人労働者の増加により、インド系住民の割合は減少しているが、経済的・社会的上昇を目指して、子弟の教育投資や、コミュニティの生活向上のための政治的、宗教的、文化的活動に励んでいる。彼らの祖先はインドから来たが、エスニック・アイデンティティを聞くと、「マレーシア人だ」と答える。彼らは Malaysian Indian といわれる。祖先が、ジャングルであったマレーシアを開拓したという誇りをもち、マレーシアに住むインド人として、マレー人と対等の権利を主張しているのである。一方で、マレー人は、多民族の宗教文化を認めているマレーシアは寛容だと考える。マジョリティとマイノリティの権利の完全なる平等性を実現するのは難しいが、マイノリティの立場からは、抵抗と変革の意識と行動を持ち続けることが、自らの立場を守る手段であるといえる。また、細分化されたコミュニティの意識を超えて、協力してまとまることが、他民族と対等につきあうために必要であろう。中国系住民とは、宗教文化の面で融合性が見られ、お互いに理解が進んでいる。こうしたことが、マレー系住民との間でも進み、民族意識が政治に利用されることがなくなれば、マイノリティの不満も解消されるであろう。今後は、他民族を対象としている研究者の協力を得ながら、各民族間の文化的差異や類似点を見出し、対立または融合の要素を明らかにしたい。文化的要素のみならず、政治的要素にも着目し、エスニシティがいかに形成されるのか、アイデンティティポリテックスの中で拮抗するエスニシティの在り方を、さらにミクロな視点で見ていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 古賀万由里	４．巻 25
２．論文標題 開発に抗する宗教―マレーシアのヒンドゥー教をめぐる事例から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 宗教と社会	６．最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 古賀万由里
２．発表標題 マイノリティの宗教施設をめぐる問題―マレーシアにおける開発とヒンドゥー寺院
３．学会等名 第26回「宗教と社会」学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayuri Koga
２．発表標題 Struggle for the Right of Hindu Temples in Malaysia
３．学会等名 Malaysian Studies Conference （国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 古賀万由里
２．発表標題 マイノリティの宗教実践ーマレーシアのヒンドゥー教寺院をめぐって
３．学会等名 日本文化人類学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 和崎春日編	４．発行年 2020年
２．出版社 刀水書房	５．総ページ数 779（担当：21頁）
３．書名 響きあうフィールド，躍動する世界（担当「慣習から宗教へ―マレーシアにおけるヒンドゥーイズムの実践と変容」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

古賀万由里　2017「東南アジアのインド文化の発展」『インド文化事典』
インド文化事典編集委員会（編）丸善出版pp.698-699　＜事典項目＞
古賀万由里　2020（予定）「ヒンドゥー寺院暴動と民族問題」『マレーシア研究』第8・9号
170頁　＜エッセイ＞
古賀万由里　2020（予定）「Andrew C.Wiford Tamils and the Haunting of Justice:History and Recognition in Malaysia's Plantations. Singapore　NUS Press, 318p」pp.126-128 ＜研究動向＞

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考